体験博物館
千葉県立房総のむら館報

「房総のむら」は、参加体験型の博物館です。原始・古代から近・現代までの衣・食・技の移り変わりを、当時の環境の中で、お客様が直接体験することができます。

開館時間　9：00 ～ 16：30
休館日　月曜日（休日の場合は開館し、翌日休館）
年末年始（2015 年 12 月 25 日～ 1 月 1 日）
臨時休館日
（2016 年 1 月 26 日、2 月 16 日）
入場料　一般 300 円（240）　高大 150 円（120）
※中学生以下と 65 歳以上無料。
※障がい者手帳をお持ちの方と介助者 1 名無料。
（　）は 20 人以上の団体料金

瓦版
大木戸

Kawaraban OKIDO
Vol.55

2015 年（平成 27 年）10 月 7 日

編集・発行
千葉県立房総のむら　指定管理者
公益財団法人　千葉県教育振興財団　房総のむら
〒 270-1506　千葉県印旛郡栄町龍角寺 1028
TEL.0476-95-3333
http://www.chiba-muse.or.jp/MURA/

平成二十七年度企画展

「千葉の鍛冶――鎌と鋏――」

会期　十月十日（土）～十一月二十九日（日）

展示概要について

鉄は、自動車や橋、繊維製品を作る機械など、私たちの生活の中で直接的・間接的に重要な役割を果たしていることは、今も変わりはありません。

房総には、古墳時代から鍛冶が存在し、七世紀頃からは県内で取れる砂鉄を利用した製鉄が始まり、多くの製鉄遺跡や集落内の鍛冶遺構が発掘調査で確認されています。

鍛冶屋は、古墳時代から現在まで連綿と続く職業であり、いつの時代も農林漁業、商工業者、武家などの注文に応じて様々な製品を作り続けてきました。

今回は鍛冶の中でも、鎌鍛冶と鋏鍛冶の職人を取り上げ、つい最近まで人々の暮らしのなかで、最も身近な道具であった鎌と鋏の歴史を紐解きます。

展示内容について

古代から中世の鍛冶については、謎がいっぱいです。そこで、考古学の力を借り、県内の遺跡から出土した遺物から鍛冶の歴史を探ります。

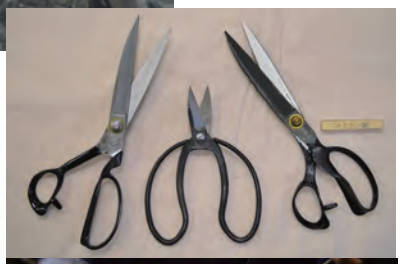
まず古墳時代から出土している鍛冶用のカナハシなどを展示します。驚くことに今のカナハシとほとんど同じ形でした。また、奈良・平安時代に多く出土する鎌を展示し、大きさや形の違いなどを見比べています。

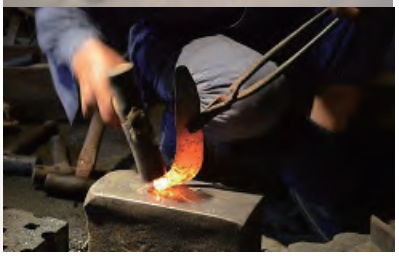
中世からは、鍛冶屋という言葉と建築や仏教とかかわった職人たちを棟札や古文書から探ります。

江戸時代後期になると、流通経済の進展とともに、多くの地域で鎌の産地が発展します。その中には、君津の久留里周辺で作られた久留里鎌があり、全国的にも名が知れていました。そうした久留里鎌の歴史や、明治中期から始まる飛雀印の房州鎌や佐原鎌などの歴史を紹介します。

鋏については、海岸に流れ着いた鋏から、初めて西洋鋏を作ったといわれる、市原の立野平左衛門の話や、江戸で花開いたラシャ切り鋏の職人と千葉とのかかわりなどを紹介します。

鋏の展示品は、和製ラシャ切り鋏の元祖、吉田弥吉の明治二十年代の鋏や、弟子たちの鋏など、歴代の腕利きの職人たちの製品





を並べます。

また、江戸時代から続く鍛冶屋の教育面や鍛冶屋の年中行事である「ふいご祭」の紹介など鍛冶屋の日常生活も垣間見ます。

その他、これまで房総のむらで鍛冶の技術を披露してくれた職人たちの紹介、千葉の砂鉄と触れ合う体験や鉄を鏡のように磨く体験展示などもあります。

さらに信州鎌の産地である長野県信濃町から、全国へ出荷している鎌を多数借りました。一言で鎌といってもその種類の多さや、大きさの違いに驚かれることでしょう。

熱い鉄に槌を振るって、1点1点丁寧に作った道具には、職人たちの心が込められています。同じ鎌や鋏でも比べてみると、微妙な違いがあるのに気付きます。それは職人の癖や流派の違いの他にも、使う人の意図を酌み取りながら作っている、鍛冶屋ならではの心遣いがあるのです。

そんな心を展示を通して感じていただければ幸いです。

（芝崎　浩平）

企画展「千葉の鍛冶」関連イベント

①講演会「和鉄のはなし」
明治時代を境に日本の刃物（鉄製品）の素材は、たたら製鉄法による和鉄（玉鋼・包丁鉄）から輸入鋼（東郷ハガネなど）に変わった。改めて和鉄を再評価してみたい。
講　師：東京農業大学　星野欣也
日　時：平成27年11月21日（土）　13：30～15：00
場　所：房総のむら内 風土記の丘資料館集会室

②展示解説会
日　時：平成27年10月12日（月・祝）、10月17日（土）、10月24日（土）、11月15日（日）
13：30～14：30

③ワークショップ
Ⅰ「農具作りの実演」（商家町並み　鍛冶屋）
実演者…高梨欣也（館山市）
日　時…平成27年11月22日（日）、23日（月・祝）
10：00～12：00、13：30～15：30

Ⅱ「ラシャ切り鋏製作の実演」（商家町並み 鍛冶屋）
実演者…北島和男（松戸市）
日　時…平成27年11月3日（火・祝）
10：00～12：00、13：30～15：30

Ⅲ「ラシャ切り鋏を使った裁断の実演と体験会」（総屋）
実演者…中丸敏朗（我孫子市）
日　時…平成27年11月8日（日）13：30～15：30

④鍛冶の体験会
鉄の小物が作れます。（事前申込不要）
日　時…平成27年10月18日（日）、11月1日（日）
①10：00～　②13：30～
料　金…無料（ただし、房総のむら入場料が必要です）
場　所…風土記の丘資料館

呉服の店「草木染」新規演目について

天然素材を染料として、糸や布を染める方法を「植物染め」や「花びら染め」などと言ったりしますが、房総のむらでは、「草木染（くさきぞめ）」という言葉を使っています。

「草木染」は、国語辞典にも取り上げられており、一般的に耳にする言葉ですが、昭和初期に故・山崎斌氏が化学染料と区別するために命名した言葉であり、数多くの実技書や古代の染色に関する研究書を残した御子息の山崎青樹氏（やまざき　せいじゅ　1923～2010）により、再興・普及しました。房総のむらでは、青樹氏のもとで経験を積まれた千葉県在住の染色家・安井永子先生の指導を受け、様々な演目を開催しています。

参加者一人一人に合わせた丁寧な指導にリピーターも多く、また、広大な敷地と豊かな自然に囲まれた房総のむらの環境が、演目の内容をより魅力的なものにしています。明治以降、手軽で鮮やかに染まる化学染料が普及するとともに、草木染は影をひそめましたが、自然素材の見直しや、世界に二つとない一点物への憧れも手伝い、草木染は近年、注目されています。毎年実施している「草木染講習会　全五回」（今年度は「上級者の草木染」に改名）では、館内の樹木を伐採し、鉈で細かくチップにし、大きな鍋で染料を煮出すことから始めますが、キャンセル待ちがでるほど人気の演目です。

これまで、房総のむらでは、実技を主とした演目を開催してきましたが、今年度は、草木染に関する知識を学ぶことを重視した「草木染学　全三回」を新設しました。季節の草木を採集し、布や媒染を変え、色の変化を学びます。また新たに、「初心者の草木染」を〈春〉と〈冬〉の年二回開催します。

天然素材を最大限に生かすためには、自然を愛で、学ぶ必要があるようです。「上級者の草木染」と「初心者の草木染〈冬〉」については、現在参加者を募集中です。皆様の参加をお待ちしています。

（中村　愛）

上総の農家
この秋冬オススメ！
本格！「炭焼き」体験

ひと昔前まで、炭焼小屋からもくもくと煙が立ち上る風景は、決して珍しいものではなく、木炭は、薪と並び日本人の生活にとって最も大切な燃料のひとつでした。特に千葉県は、江戸時代には、佐倉炭、久留里炭などに代表される炭の生産地として、全国に名を馳せていました。

房総のむらの農家には炭焼き窯があり、三日間かけて本格的な「炭焼き」を体験することができます。今日は、体験の様子をほんの少し覗いてみましょう

秋も深まる十一月、房総のむらの炭焼きが始まります。まずはじめの二日間は、薪の入った窯に火を入れ、ひたすら団扇で仰ぎ続けて窯の温度を上げていきます。顔が熱くなり、腕はパンパンになるのですが、メラメラと燃える炎、赤く光る薪を見ていると、不思議と暖かい気持ちになっていきます。そして、合間を見ながらお持ち帰り用「炭俵」を編みつつ、二日目は窯の蓋をぴったりと閉じて帰宅します。

炭焼小屋から、煙が立ち上ります。

燃え上がる炎の中に、赤く光る薪が幻想的

そのままじっと待つこと二週間…三日目（最終日）に再度集まり、恐る恐る窯の蓋を開けてみます。すると、中には立派に焼きあがった「黒炭」が！　窯から取り出し、出来具合をチェック。次の炭焼きに使う薪を窯に入れ、お一人約四キロの炭をお持ち帰りいただけます。脱臭用、炭火焼用、何に使うかはお客様次第です。皆様の参加をお待ちしております。

（萩原　衣美）

風土記の丘資料館
縄文人体験「土器作り」

土器作り体験は、「土器作り」、「ミニチュア土器作り」、「土偶・埴輪作り」の三体験を年1回づつ開催しています。

それぞれの土器作り体験は、粘土を捏ねて形作る作業と、十分に乾燥させた後に焼き上げる作業の二回の体験から成っています。それぞれの体験には、半日ほどの時間を費やします。

粘土は縄文人と同様に関東ローム層中から採取し、黒土などをブレンドして当時の粘土を忠実に再現しています。形作りは実物の他、写真や複製品を見ながらの作業ですが、できあがりを見ると最初は忠実に作っていくのですが、最終的には作者の創造力がかき立てられるのか、個性豊かな形となって出来上がります。これも作品の魅力となっています。

そして、縄文人の技術力の高さを皆さん実感します。特に、土器作り工程で多くの方が驚かれるのが、文様の付け方や使用する道具類です。縄文土器の名前の元となっている縄文も、沢山の種類があること、縄文以外でも様々な工夫を凝らして文様が付けられていることが分かると同時に、当時の人々の土器への思いが、いかに深いものであったかが強く感じとれます。

形作りを終えると、一月以上乾かします。完全に乾くと土器は一割以上収縮します。久しぶるに見て、まず、大きさに驚きます。また、ヒビなどが無いとホッとします。

最後の仕上げとして、野焼きによる焼き上げを行います。勢い強い炎に包まれた土器は、鉄のような幻想的な真っ赤に燃え上がります。縄文人も同様な光景を目にし、畏敬の念を抱いていたことでしょう。

是非、興味のある方の参加をお持ちしています。

（野口　行雄）

ボランティア活動記　その4

縁日夕涼みにおける活動報告

八月八日（土）・九日（日）は、夜八時まで延長開館し、「むらの縁日夕涼み」を開催しました。毎年、夜の打ち上げ花火や夏ならではの大道芸を目当てに、多くのお客様にご来館いただいていますが、今年は職員の切実な願いが通じたのか、前日まで続いた猛暑が落ち着き、一日当たり六千人を超える親子連れの姿が見られました。

三月に発行した『大木戸五十四号』では、むらの自然ガイドボランティアの日々の活動を紹介しましたが、この「縁日夕涼み」でも、自然ガイドボランティアさんに臨時案内所における会場案内や、水鉄砲づくりのサポートをしていただきました。「縁日夕涼み」におけるボランティアの活動は、今回が初めての試みでしたが、職員だけでは行き届かない気配りや心配りに助けられました。

また、ボランティアだからこそ気付く、問題点や課題は、「なるほど」と思わせることばかりで、反省させられることしきりでした。この場を借りて、深くお礼申し上げます。

（中村　愛）

ボランティアさんのサポートで的に命中

会場案内もお手のもの

地域とつながる「秋のまつり」

○十一月三日（文化の日）に開催する「ふるさとまつり」

○十一月二十三日（勤労感謝の日）に開催する「地域感謝の日」

「ふるさとまつり」は、房総のむら友の会、房総のむら、栄町が協働で行う賑やかなおまつりです。地域芸能の披露や恒例のもちまき大会などを行います。当日はどなたでも入場無料です。詳しくはホームページでお知らせ致します。

「地域感謝の日」は、地元住民への感謝の意を込め、鹿島神伝直心陰流剣道（かしましんでんじきしんかげりゅうけんどう）の演武や箏の演奏の他、さまざまな体験・実演販売などが催されます。千葉県在住の方と在勤の方の入場料は無料です。詳細については、開催一ヶ月前にホームページにてお知らせ致します。

また、「ユニセフ・ラブウォークin房総のむら」が同時開催となります（千葉県ユニセフ協会にて要事前申込。参加者はむらの入場無料）。参加費は大人（中学生以上）五百円、子ども（四歳～小学生）二百円です。皆様の来場をお待ちしております。

平成27年度下半期の主な予定

10月10日（土）～11月29日（日）
平成27年度企画展
「千葉の鍛冶 ―鎌と鋏―」
11日（日）：歴史の里の音楽会
24日（土）：写生コンクール作品展（～11月29日）
25日（日）：房総座　柳家三之助落語会

11月3日（火・祝）：ふるさとまつり（文化の日）
23日（月・祝）：地域感謝の日（勤労感謝の日）

12月12日（土）～2月28日（日）：
トピックス展「レンズをとおした房総のむら」

平成28年1月2日（土）～3日（日）：むらのお正月

2月28日（日）：房総座　柳家三三落語会

3月12日（土）～6月5日（日）：
トピックス展「里山と林業・農業（仮）」

◇編集後記◇

爽やかな風が吹き、むらの風景は徐々に秋色に染まってまいりました。

九月二十日・二十一日に行われた「稲穂まつり」を皮切りに、まつり、企画展、音楽会、写生コンクール作品展、落語会と、さまざまな催しが目白押しです。五感を通して楽しめる、むらのイベントに、ぜひお越し下さい。

（蒲生　真奈美）